PRO MUSICA NIPPONIA

日本音楽集団
PRO MUSICA NIPPONIA

第154回定期演奏会

The 154th Regular Concert～New Year's Concert

～新春の奏で～

1999年1月26日[火]
午後7時開演
津田ホール

主催：日本音楽集団
〒151-0073 東京都渋谷区笹塚3-17-1滝沢ビル302
TEL 03-3378-4741 FAX 03-3376-2033

助成：文化庁・日本芸術文化振興会
舞台芸術振興事業

Arts Plan 21　芸術文化振興基金

プログラム

一、座興七重（ざきょうしちえ）（1989年）　和田　薫作曲

Kaoru Wada：Zakyou-shichie

［笛］西川浩平　［尺八］加藤秀和　［三味線］簑田司郎　［琵琶］石田さえ
［二十絃箏］山田明美　［十七絃］大畠菜穂子　［打楽器］臼杵美智代

日本音楽集団創立25周年記念委嘱作品。笛、尺八、琵琶、三味線、二十絃箏、十七絃、打楽器という七つの楽器のために書かれている。これら七種類の個性ある個々に確立している楽器が一堂に会し、タイトルのとおり“遊びの場”を舞台の上に作り出す。“遊び”が芸の中の粋として取り入れられ、この中で各演奏者の粋な芸が繰り広げられる。

日本音楽集団とのご縁が始まったのが、約十年前の1988年、アメリカ公演の折からでした。この十年間で集団や集団を取り巻く環境は激変してきましたが、「邦楽音楽の可能性」と「世界の中（音楽世界も含め）の日本音楽集団」の存在意義は、今なお重要な位置にあると再認識しております。
創立25周年記念の委嘱として作曲されたこの作品が、十年を経て、35周年を迎える年の最初の演奏会に再演されるということに、深い感慨をおぼえます。　（和田　薫）

二、覡（かむなぎ）～十七絃と打楽器のための（1992年）　西村　朗作曲

Akira Nishimura：Kamunagi for 17-string Koto and percussion

［十七絃］宮越圭子　［打楽器］高橋明邦

1992年に菊池悌子氏の委嘱により作曲。打楽器を伴う十七絃のための序奏と舞曲。作曲者は、韓国の宗教楽・礼楽・民族音楽に対するオマージュ的な作品をいくつか作曲しているが、これもその一つである。この舞曲はリズム的にも音型的にも、韓国の伝統音楽の影響があり、カヤグム・サンジョの旋律が引用されている。

日本音楽集団の皆様、御創立35周年誠におめでとうございます。伝統の上に新たな創造的ジャンルを確立してこられた貴団の御活動とその御成果は、21世紀へと向かう世界の文化シーンの中で、わが国が大いに誇るべきものと存じます。貴団のますますの御発展を祈念申し上げますとともに、このたびのコンサートに拙作をお加え下さいましたことに対し心よりの感謝を申し上げます。
（西村　朗）

三、樹冠（じゅかん）（1989年）　長沢勝俊作曲

Katsutoshi Nagasawa：Jukan (Coronary tree tops)

［尺八］米澤浩　［二十絃箏］Ⅰ熊沢栄利子　Ⅱ山田明美　［十七絃］久東寿子

1979年「四つの個による楽」委嘱作品。“樹冠”とは木々の枝や葉の茂っている部分のことで、作曲者の好きな言葉の一つである。それぞれの楽器の個性の対峙、尺八と箏群のそれ、そしてアンサンブルへ。樹木の葉々が一でありかつ多であるように各楽器の響きが際立ち絡み合い、ある調和の世界を形成している。

日本音楽集団は今年で創立35周年を迎える。「樹冠」を作曲してから20年。新進気鋭の若者たちが樹冠のようにすくすくと成長することを願い作曲した。今夜の演奏会は次の世代をになう若者達の手によって演奏される。樹冠の名のごとく青々とした葉や枝がおい茂げれる活力のある集団になることを願っている。　（長沢勝俊）

……休憩……

四、片足鳥居の映像（1971年）　佐藤敏直作曲

Toshinao Satoh：Impression of a One-Pole Torii

［尺八独奏］宮田耕八朗

1971年宮田耕八朗委嘱により作曲。片足鳥居とは、長崎の坂本にある、片足で立ち続けている石の鳥居のことである。この鳥居は、原爆が投下されたというまぎれもない事実を教え伝えている。この作品は、そのことへのさまざまな観念と、片足で立っているという、その力学的な「美」、そしてそれらが生みだす不思議な空間などに触発されて生まれた。

私は今でも長崎に行くとこの片足鳥居に詣でる。そしてきまって不思議な感慨で立ち尽くす。
４、５年前、長崎の知人がこの風景をあしらった有田焼の大皿を、わざわざ窯元に誂えて送ってくれた。被災地の人にもこの曲が認められたような気がして嬉しかった。日本音楽集団と宮田耕八朗氏がもたらしてくれた賜物である。（佐藤敏直）

五、夷曲「西綾楽」（ひなぶり・さいりょうらく）（1985年）　芝　祐靖作曲

～敦煌壁画と琵琶譜によせて～

Sukeyasu Shiba：Hinaburi-sairyouraku

［笛］Ⅰ西川浩平　Ⅱ藤舎理生（助演）［篳篥］西原祐二　［笙］藤本礼美（助演）
［尺八］Ⅰ米澤浩　Ⅱ加藤秀和　Ⅲ添川浩史［胡弓］多々良香保里　［琵琶］石田さえ
［箏］Ⅰ宮越圭子・桐岡知代　Ⅱ熊沢栄利子・嶋﨑光代
［十七絃］Ⅰ大畠菜穂子・丸岡映美　Ⅱ中垣雅葉・早川智子
［打楽器］尾崎太一・臼杵美智代・立枝恵子
［指揮］稲田康

敦煌琵琶譜（コピー）に出会ったのは1981年、国立劇場雅楽公演「西域の音」の時で、アジアの４種のリード楽器《メイ、バラバーン、管子、篳篥》の合奏音楽を作るのが目的でした。訳譜作業の際に参考資料として「シルクロード写真集」を眺めたところ、莫高窟の壁画にすっかり魅せられました。その後、琵琶譜のメロディーと壁画のイメージを暖めていた時に日本音楽集団より作品の委嘱を受けました。
曲は莫高窟の静かな佇まいに始まり、壁画に見る瞑想場面や胡旋舞の踊りと続きます。クライマックスは琵琶譜より浮かびあがった旋律を用いて唐王朝のきらめきを表し、終りは再び莫高窟の静かな風情に戻ります。（芝　祐靖）

日本音楽集団が35周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。創立当時、何かあると喧々諤々、すぐにでも空中分解しそうな気配がありましたが、全団員が《良い音楽を響かせたい》という共通の信念を持ち、また集団継続への意地と情熱が35周年という金字塔を打ち立てた礎にあると思います。
思えば私自身「現代雅楽」のトリコになったのも日本音楽集団の活動にあこがれを感じていたからです。願わくば音楽集団50周年の祝詞を述べたいものです。更なるご活躍を祈念します。
（芝　祐靖）

次回定期演奏会予告

第155回定期演奏会～春の総合定期

1999年5月27日（木）津田ホール　午後七時開演

一、Krotka　Noc 短夜（みじかよ）／ヴォジミェシュ・コトンスキー作曲（ポーランド）

二、呼応／杵屋正邦作曲

三、四拍子協奏（委嘱・初演）／肥後一郎作曲

［笛］西川浩平　［打楽器］尾崎太一・仙堂新太郎・望月太喜之丞

四、霜夜の砧／柴田南雄作曲

［尺八独奏］三橋貴風

五、邦楽器のためのシャコンヌ／安達元彦作曲

［指揮］田村拓男

お知らせ

1999年度

日本音楽集団 団員募集

オーディション：1999年3月24日（水）

詳細は事務局へお問い合わせ下さい。

箏

二十絃箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追求した箏

日本音楽集団推薦

琴光堂和樂器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL(3792)8481 FAX(3792)8437